

発達障害のある児童生徒数及び教育相談件数の増加について

八戸学院大学地域経営学部
教授 木村浩哉

1 緒言

発達障害は自閉症、学習障害、注意欠陥多動性障害を主とした脳機能の障害とされている⁽¹⁾。近年「発達障害の子どもが増えている」、また特に年配の方からは「発達障害の子どもは昔こんなにいなかった」等の話を聞くことがある。果たしてそのような客観的な事実があるのだろうか、統計的データや社会的環境の変化を元に検討したことを報告する。

2 調査方法

文部科学省及び青森県教育委員会の特別支援教育に関わる統計データ、発達障害のある子どもに関わる関係法規、八戸市においての公的教育相談施設の状況に加えて、児童生徒を取り巻く社会の変化と関連づけて調査した。

3 結果と考察

表1は全国の公立小学校における注意欠陥・多動性障害に関する通級指導を受ける児童数である⁽²⁾。5年間で約14,000人増加している。

また、表2は八戸市内小学校と中学校の数と自閉的傾向・情緒障害に対応する特別支援学級（以下、自・情特支学級）の設置状況である⁽³⁾。2017年度と2025年度を比較すると小学校においては8年間で学校数が2校減少しているのにもかかわらず、自・情特支学級数が19学級増加している。また、中学校では学校数は変わらないものの自・情特支学級数は3学級増加している。

以上のように客観的数字として社会の中で発達障害について指導を受ける児童生徒数は増加している。

表1・2は平成の後期と令和の初めの比較となるが、資料にない昭和の時代の対象の子どもはもっと少なかっただろうと推察される。

調査結果より、以下3観点から考察した。

まず、第1に「調査のきっかけとなった緒言の「昔、発達障害はこんなにいなかった」

表1 全国の公立小学校において注意欠陥・多動性障害に関する通級指導を受ける児童数

年度	児童数（人）
2018	20,626
2023	34,654

表2 八戸市内小・中学校の特別支援学級（自閉的傾向・情緒障害）の設置状況

年度	小学校		中学校	
	学校数	学級数	学校数	学級数
2017	43	42	24	24
2025	41	61	24	27

という年輩の方(70代男性)の声に注目してみたい。「昔」は昭和の時代のことと推察されるが、「こんなになかった」の表現は、いたことはいたが、少なかったと受け取ることができる。確かに、子どもたちの遊びの中で「かくれんぼ」するとすぐ見つかるようなタイプや遊びのルール飲み込みが難しいタイプの子はいた。しかし、いわゆるこのような要領が悪いタイプの子どもも、昭和の屋外での遊びの中で、それなりの仲間内の位置を保ちつつ遊びの中に入っていたと考えられる。

ところが、時代は移り、社会はデジタル化され、複雑化した。効率化が求められ、子どもたちの遊びの中だけでなく、学校生活や社会のシステムにおいても、「ついてこれる」・「これない」が明確になり、今まで社会の中で内在していた発達障害のある子どもたちが炙り出されるような形で顕在化してきた。そのため、周囲の特に年配者からは「増えた」と感じられたと考えられる。

第2に「増えた」子どもたちに対応するために表3のような法的整備がされたことがあげられる。特別支援学校ではない通常学校でも特別支援教育を実施することになったり、合理的配慮の提供が義務づけられたりしたことにより、保護者が教育相談をしやすい環境となり、相談件数が増えた。

表3 発達障害のある子どもに関した法的整備⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾

年	法律名	内容
2007	学校教育法一部改正	幼稚園、小・中学、高等学校における発達障害のある子どもに対しての特別支援教育の実施
2016	障害者差別解消法	合理的配慮の提供、障害者個人のニーズへの対応、社会的障壁の除去
2016	発達障害者支援法の一部を改正する法律(改正発達障害者支援法)	できるだけ早期の発達支援、切れ目ない発達障害者の支援

第3は、表4にあるように八戸市における発達障害のある子どもに関わる公的教育相談施設の状況の変化である。

八戸第二養護学校及び八戸高等支援学校はセンター的機能を有し、発達障害に関する教育相談に対応する(ただ、入学に関しては、知的障害のある子どもが対象となる)。八戸高等支援学校が分離・独立したことにより、結果的に相談の窓口が増え、保護者が相談しやすくなった。

また、八戸市子ども支援センターは八戸市総合教育センターからの八戸市総合保健センター内に機能を充実させる形で移転した。

このようなことから、教育相談の件数が増えたと考えられるが、子どもや保護者のニーズに応える機会が増えたことは肯定的に捉えることができると考える。

表4 八戸市における発達障害のある子どもに関わる公的な教育相談対応の施設⁽⁷⁾⁽⁸⁾

年	施設	事項
2018	八戸高等支援学校開校※	八戸第二養護学校※高等部より分離・移転
2020	八戸市子ども支援センター	八戸市総合保健センター内に移転

以上のような3観点から、発達障害のある子どもの数は、過去において少なく感じていたものが、子どもをとりまく社会の状況から、現代においては多く感じられるようになった。教育相談の件数は全国的にも八戸地域においても増えているが、これは法的整備や木いく相談体制の充実によるものであり、子ども保護者にとっては、安心できる体制が整いつつあることと捉えることができる。

4 結語

「発達障害のある子どもが昔より増えている」という声を聞くが、発達障害のある子どもは、過去も存在していたが、効率化を求め、複雑化する社会の中で顕在化し、周囲も発達障害に気づきやすくなり、その結果、増加したと感じられるようになった。また、発達障害のある子どもを支援する法律の整備、加えて教育相談を受ける施設の機能の充実により、保護者にとって相談しやすい状況が生まれ、その結果、相談件数が増加した。

参考文献

- (1) (5) 発達障害の支援を考える議員連盟：改正発達障害者支援法の解説、ぎょうせい、平成29年
- (2) 文部科学省：令和5年度特別支援教育資料、令和7年
- (3) 青森県教育委員会：青森県の特別支援教育、平成29年度・令和7年度
- (4) 文部科学省：特別支援教育の推進のための学校教育法等の一部改正について（通知）、2007
- (6) 川島聡ら：合理的配慮、有斐閣、2016
- (7) 八戸高等支援学校ホームページ、2026
- (8) 八戸市総合教育センターホームページ、2026